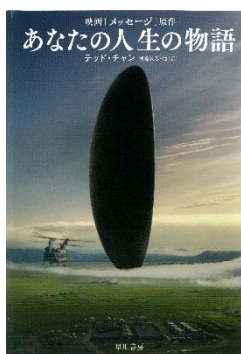


土木屋の読書と旅(10)

令和2年3月

久しぶりに原作を読みたいと思わせる映画をみた。SF映画「メッセージ」である。映画配給会社のキャッチコピーでは「突如出現した未知なる飛行物体。彼らは人類に〈何〉を伝えようとしているのか？ 謎の知的生命体と意思の疎通をはかるために軍に雇われた女性言語学者（ルイズ）がそれを探っていく。その謎を知ったルイズを待ち受ける、美しくそして残酷な切なさを秘めた人類へのラストメッセージとは（配給会社オフィシャルサイト）」となる。

原作者はテッド・チャン、親の時代に移民してきた中国系米国人であり、コンピューター・サイエンスを専攻しブラウン大学を卒業、テクニカルライターのかたわら創作活動をおこなっている。原題は「あなたの人生の物語」(ハヤカワ文庫)であり、この映画タイトルと原作タイトルとの間に随分乖離があるのは気になるところである。映画としては誠実に作られたものであるが、同時にエンターテインメント作品でもあるため、エイリアンのメッセージをどう読み解くかというストーリー展開の面白さの方に重点を置かざるを得なかったのではないかと考えている。



この原作本にはアイディアに難解さがあるためか、テッド・チャン本人が書いた“作品覚え書”があり、「この話は、物理学の変分原理に対する興味から生まれた。……人が避けられない事態に対処する中で、^{変分}変分原理を使えるかもしれないと思いついた。…」とある。*変分とは関数 $u(x)$ を変数とする関数、つまり関数の関数を汎関数 $J[u(x)]$ といい、変数の増分を微分 dx ということに対し汎関数の増分を変分 δJ という。物理の問題では積分の形で表される汎関数を最小または最大（停留値、微分では極値）にする関数 $u(x)$ を求めることを変分問題という。解析力学や有限要素法（Rayleigh-Ritz 法）の理解に必要な数学的基礎概念でもある。

小説では変分の教科書の初歩例に出てくるフェルマーの原理“光は到達時間が最小となるような経路を選んで進む（光学でいう屈折の法則＝スネルの法則の変分問題）”の考え方を敷衍して、人類は事象の時系列的（過去から生じる未来）因果律的（原因があって結果がある）解釈を好むが、エイリアンは事象の目的論的（事象を一定期間の時間という視点からみることにより、満足されなければならない要件や最小化もしくは最大化という目的があるということ）を認識し、この変分原理に沿った考え方では直感的にその目的を満たすには最初と最終の状態を原因が発生する前に結果に関する知識があることが必要）解釈をする。この思考方法の異なる人類とエイリアンがどのようにコミュニケーションするのか。小説の文章構成も変分的な順序・配列になっている。果たしてどこまで理解できているのか不安でもある。

そしてこの映画は「あなたの物語はこの日が始まりだと思った。記憶とは不思議なもの、思ってもみなかった働きをする。人は時の流れに縛られている。その順序に…」のナレーションから静かに始まる。

* * *

順序について、“1594”は私が使用する車のナンバーであり意図をもって選択したものではないが、順序を変えて“1954（年3月）”とすると私の生年月日になる。さらに100を引くと“1854年3月”は吉田松陰が下田沖に停泊するペリー艦隊に密航を企てた日となる。司馬遼太郎の小説に『世に棲む日日』がある。司馬は文庫版あとがきにこう記している。「とくに、人間が人間に影響をあたえるということは、人間のどういう部分によるものかを松陰について考えてみたかった。そして後半は、影響を受けたひとりである高杉晋作という若者について書いた。……『世に棲む日日』という題は、高杉の半ばふざけた

土木屋の読書と旅(10)

令和2年3月

ような辞世の、それも感じようによっては秋の空の下に白い河原の石が磊々^{らいらい}とところがあるような印象からそれをつけた。」とある。晋作は「東行」と号したが、これは漂泊の歌人「西行」への憧憬か。

《高杉晋作辞世の句》 おもしろきこともなき世をおもしろく すみなすものは心なりけり

* * *

昨秋10月下旬、3泊4日で伊豆半島周遊の旅に出た。目的は富士見と大室山登頂と下田散歩。

【西伊豆からの富士見】 名古屋から各駅停車のこだまで出発点の三島駅へ向かう。本日晴天、最後の通過待ち駅「新富士」で5分間プラットフォームの窓越しのアルミサッシ枠で分画された、画枠いっばいの富士に圧倒される。昼過ぎについた三島駅は東海道本線の小さな駅ではあるが、同じ構内に観光地修善寺と結ぶ伊豆箱根鉄道駿豆線のターミナル駅もあり、観光客で賑わう駅である。駅南の市街地は微細な凹凸が手の指を広げたような地形をなし、凹部を富士からの豊かな湧水が流下する五十三次の宿場町でもある。明日の天気は雨との予報



を聴き、初日から「だるま高原」「煌めきの丘」など駿河湾越しの富士山ビュースポットを走破する。

【大室山・東伊豆からの富士遠望】 東伊豆にある大室山は小さいながら(標高580m)火山であり、国の天然記念物でもある。登山道により山腹が荒れたことから徒歩での登頂は禁止され、山頂まではリフトでの移動となる。火口の中腹には浅間神社があり、祭神を磐長姫命とする。この磐長姫命の妹が富士山本宮浅間大社の祭神・木花開耶姫命である。つまり大室山は富士山のお姉さんの山であるが、その深層心理には嫉妬もあり、大室山山頂で「富士はきれいだな〜」などと富士を崇めると大室山の磐長姫命が拗ねてしまい、拳句の果てには悪天候にしてしまうとの伝説がある。事態はまさにその通りとなった。観光写真のように東伊豆・伊豆高原からの富士山遠望を期待していたが、リフトに乗る時点から小雨状態になり、火口周りの遊歩道では体が浮き上がるくらいの強風となった。警戒レベル4(避難勧告)級をひしひしと感受し、途中で火口周遊歩道を自主的に断念し下山した。



【下田のまち歩き】 半島東海岸を南下するにつれて天気が回復してくる。下田の市街地が見え始めたところで左折して玉泉寺へ立ち寄る。ハリスが初代総領事として米国領事館とした寺として知られ、唐人お吉がハリスに仕えた場所でもある。すぐ近くの海岸縁には松陰が米国艦船へ小舟をこぎ出した弁天島がある。下田の町の全景は伊豆急下田駅前からロープウェイで登る寝姿山自然



公園から眼下に見渡すことができる。町としては背の低い平凡な街並みがゆったりと形成されているが、下田条約が結ばれた了仙寺から港に続く観光客にも人気が高いペーリーロードは唯一昔の面影を残す。秋の夕暮れは山口よりも早く、4時過ぎには次の宿泊地・堂ヶ島に向けて半島を西に横断し始めた。

今回の周遊ルート曲線の変分は、端点(出発地と到着地)を固定して、旅の楽しみを目的関数とした場合、はたして停留値(合目的的最大値)となっているのだろうか。